

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com
http://hokkaido-poland.com/

POLE

第 87 号 2016.1.15
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所

〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画株式会社 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

67 SAPPORO SNOW FESTIVAL
さっぽろ雪まつり



第 43 回 国際雪像コンクール ポーランドのチームが挑戦

2 月 4 日 (木) ~ 8 日 (月)、大通西 11 丁目国際広場
(4 日開会式、4 ~ 7 日雪像制作、8 日審査会・表彰式)

2 年前にも参加したシュクラルスカ・ポレンバ(Szklarska Poręba)市からの女性 2 人・男性 1 人のチームが再挑戦します(主催[派遣]: 駐日ポーランド共和国大使館・共催[応援]: 本協会)。

ポーランドチームの雪像作りを訪問し、一緒に写真を写すなど、国際交流を楽しんでみませんか。

〈ポーランドチームからのメッセージ〉

私たち「ヤロミ」チームは 2002 年、故郷の町シュクラルスカ・ポレンバ市の第 1 回雪像コンクールのときに結成され、それ以来毎年コンクールに参加し腕を上げてきました。

そして 2 年前、思いがけず日本からご招待を受け、ポーランド代表として誇りをもって第 41 回国際雪像コンクールに参加しました(写真右、ポーレ第 81 号参照)。

3 人の女性が 3メートル立方の超カタイ雪の塊から雪像を彫り上げることに、みなさんビックリしていました。私たちのようにまったく女性だけの雪像チームは初めてだったそうで、観光客、他の雪像制作チーム、札幌市民のみなさんから、どれほど注目され、暖かい応援をいただいたことでしょう。

私たちは千回も「カワイイ」と言っていたきました。はじめのうちは「ハワイ」と呼ばれたのだと思って、私たちはハワイではなく、ポーランドから来ましたと丁寧に説明していました。

今年またお招きいただいたのはビッグニュースです。札幌でまたお会いしましょう。



チームメンバーは前回も参加したマリア・ミシュタル(Maria Misztal)、ユスティナ・グラフ(Justyna Graf)、そして地元の彫刻家で初参加のグジェゴシュ・パヴウオフスキ(Grzegorz Pawlowski)です。
頑張ります。(ヤロミ)

14th
ミュンヘン・
クリスマス市
in Sapporo



ポーリッシュ・ポタリーの出店

報告

昨年もミュンヘン・クリスマス市が 2015 年 11 月 27 日~12 月 24 日に札幌の大通公園 2 丁目会場で開催されました。例年になく暖冬のせいか、会期中に国内外から 130 万超もの人々が訪れたそうです。一昨年につづき出店したボレスワヴィエツ陶器も、素朴な感じが受けて大変な人気です。足を止めた人に聞くと、やはりポーランドの文化を感じるこの陶器に関心があったといいます。

店長のアグニェシュカ・ポヒワさんは「多くの人々が立ち寄ってくれてうれしかった」と話していました。この陶器のキャッチコピーは「ポーランドからやって来たかわいい陶器たち。一つ一つ手作りの温かみのあるフォルム。クリスマスギフトにも最適」とあります。みなさんはどの陶器が気に入りましたか。(文・写真:尾形芳秀)



ポーランド 映画

講演会 & 上映



第74回
例会

久山氏の「講演会」(第74回例会) & 映画
上映3作品の「解説トーク」で映画を存分に
楽しむ2日間です！是非お越しください。

久山宏一氏講演会 +

2月5日(金)

名作映画についての講演会

『灰とダイヤモンド』の成立と受容

(1958年、アンジェイ・ワイダ監督)



講師：久山 宏一 (ポーランド文化研究者)

日時：2016年2月5日(金) 18:30～20:30

会場：札幌エルプラザ 4F 中研修室(北8西3)

共催： ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

※ 入場無料、事前申込み不要

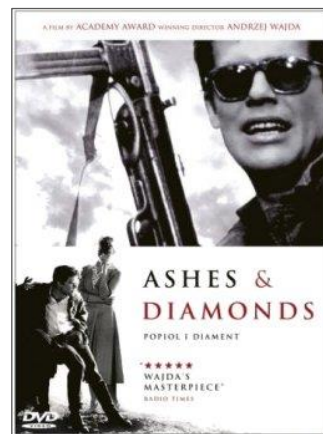


ポーランド映画不朽の名作『灰とダイヤモンド』について、ポーランド文化研究者・映画通であり、通訳としてワイダ監督とも親交のある久山宏一氏をお迎えして、語り合しましょう。

〈講演〉

1. アンジェイ・ワイダ(1926年3月6日生)が生きてきた時代 ～90歳の誕生日を一月後に控えて～
2. ワイダのフィルモグラフィ
3. ワイダ映画に描かれた第二次世界大戦
4. 映画『灰とダイヤモンド』概説
5. 小説『灰とダイヤモンド』(1948年、イェジ・アンジェイェフスキ作)概説
6. 『灰とダイヤモンド』～小説と映画の間～
7. 映画『灰とダイヤモンド』の問題
 - ① 「歴史」を「現代」として描く
 - ② 配役が決まるまで ～ズビグニェフ・ツィブルスキという俳優～
 - ③ 古典悲劇のように ～三一一致の法則～
8. 日本における小説・映画『灰とダイヤモンド』受容 ～大島渚を中心に～

〈質疑応答〉



(講師紹介)くやま・こういち 埼玉県生まれ。東京外国語大学ロシア語科卒業、早稲田大学大学院博士課程(ロシア文学)中退。ポーランド・ポズナン市アダム・ミツキェヴィチ大学より博士号(スラヴ文学)取得。専攻はロシア・ポーランド文学、ポーランド文化、比較文学。ポーランド語通訳・翻訳、東京外国語大学非常勤講師、ポーランド広報文化センター専門職員。

会がやって来る！


ポーランド映画祭2015 in 札幌 POLAND FILM FESTIVAL IN SAPPORO

2月6日(土)



2月6日[土] スケジュール

- 10:30 — 開場
- 11:00 — 開幕挨拶: 駐日ポーランド共和国大使
ツィリル・コザチェフスキ閣下(予定)
映画解説トーク: 久山宏一
- 11:20 — 上映『エヴァは眠りたい』(12:55終了予定)
場内入れ替え
- 13:30 — 開場
- 13:40 — 映画解説トーク: 久山宏一
- 13:55 — 上映『約束の土地』(16:44終了予定)
場内入れ替え
- 17:30 — 開場
- 17:40 — 映画解説トーク: 久山宏一
- 17:55 — 上映『ヴァバンク』(19:44終了予定)

日時 : 2015年2月6日(土) 11:00~19:45
 会場 : 札幌プラザ2・5(南2西5 狸小路5)
 料金 : 一般1,100円、学生500円 (税込・各回入替制)
 主催 :  ポーランド広報文化センター
 INSTYTUT POLSKI TOKIO ほか
 後援 : 駐日ポーランド共和国大使館、北海道ポーランド文化協会ほか、配給: マーメイドフィルム

今回は19世紀のウッチを舞台にしたワイダの壮大な歴史劇『約束の土地』をはじめ、“ポーランド派”が活躍した1950年代から現代まで、ウッチ映画大学が世に送り出した貴重な作品群をご紹介します。ポーランド映画を支えてきたウッチの文化と魅力を、たっぷりとお楽しみください。

Ewa chce spać
エヴァは眠りたい



タデウシュ・フミエレフスキ監督 1957年 | 99分 | モノクロ | デジタル・リマスター版

開幕挨拶+解説11:00 ◆ 上映11:20~ 幻想とリアルを織り交ぜた、不条理でダークなユーモアとルネ・クレール風の抒情性をあわせつつフミエレフスキ(1954年ウッチ映画大学卒)の大ヒット作。娯楽喜劇として作られた戦後最初の作品と言われ、全住民が警官か泥棒という奇妙な町に若い娘エヴァがやってくる物語は、ポーランドの現実を暗示しているかのようだ。サン・セバスティアン映画祭グランプリ。

Ziemia obiecana
約束の土地



アンジェイ・ワイダ監督 1974年 | 169分 | カラー | デジタル・リマスター版

解説13:40 ◆ 上映13:55~ 70年代のワイダ(1953年ウッチ映画大学卒)は文学作品を数多く映画化しているが、なかでも国内外で高い評価を得ているのが本作。ヴワディスワフ・レイモントの小説をもとにユダヤ、ポーランド、ドイツという異なった民族に属する若き親友3人が工業都市ウッチで身を立てようとする物語は、青春群像劇であり、同時に富んだ大都市の肖像にもなっている。

Vabank
ヴァバンク



ユリウシュ・マフルススキ監督 1981年 | 109分 | カラー | デジタル・リマスター版

解説17:40 ◆ 上映17:55~ ウッチ映画大学を卒業後、70年代後半から活躍しているマフルススキの大ヒット作。30年代のワルシャワで刑務所帰りの詐欺師が再び悪事を働く犯罪コメディ。米映画の名作『スティング』を想起させる出来栄は一級品。ポーランドで知らない人はいないとも言われる本作は、同じキャストとスタッフで続編もつくられている。また主演俳優は監督の父親である。

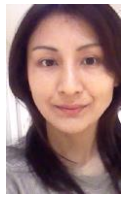
《第75回例会》講演会 **ピウスツキと日本、北海道、先住民族**

～2020年東京五輪までに意識しておきたい人物史～

講師：新井 藤子（北海道大学大学院）

日時：2016年2月20日(土)14:00～16:00

会場：札幌エルプラザ 4F 中研修室(北8西3)



ブロニスワフ・ピウスツキはポーランドのアイヌ民族研究者として知られる。1866年、現在のリオニアに生まれ、19歳の時にロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリンへ流刑となり、刑期満了後も日本、米国、西欧を巡り、民族資料の収集、調査、それらに係る執筆、展示等に従事、第一次大戦下には、他者理解の手段として百科事典の編纂を行い、究極の平和に結びつけようと奔走した。

このような説明は、井上紘一ら日本の研究者が1970年代から行ってきたピウスツキの経歴や業績の掘り起こしによって定着した。彼らの研究活動は、ピウスツキの民族研究者としての人物史を構築するとともに、2013年、白老のアイヌ民族博物館における胸像の建立に結実した。

しかしながら、日本社会におけるピウスツキの認知度は現在もあまりに低く、彼に関する情報は常に特定の研究者に由来する。また、胸像はポーランド

政府による「寄贈品」であり、そこに日本の主体性をみることは難しい。2020年東京オリンピック・パラリンピックを機に、北海道にも諸外国からの訪問客が増えるなら、その際、白老の地でピウスツキについて説明できる日本人はどれだけいるのだろうか。

そのような問題意識から、この講演では、会場のみなさまと情報を共有し「日本の文脈からピウスツキを諸外国に説明できる」途をさぐりたい。

そのため、ピウスツキの最初の公的な実績となった、1900年パリ万国博覧会での極東先住民展示に焦点をあて、講師が明らかにした展示の実態、実情を出発点に考察を進める。

*1928年の博覧会国際事務局発足まで、オリンピックは万国博覧会附属のスポーツ大会として開催されていた。博覧会を通じて民族を考えることとオリンピックとは無関係ではない。

ピウスツキの生い立ちや業績を通して、日本の何がわかるのか、北海道は彼とどのように関わったのか、その民族研究は日本の民族のあり方のどのような面を明らかにするのか、日本人の主体性を問う時間を共有したいと思っている。（新井藤子）

〈講師紹介〉あらい・ふじこ 1972年大阪生まれ。社会人入試を経て、2012年より北海道大学大学院文学研究科（北方文化論専修）修士課程在学。専攻は博物館学。民族学者という従来のピウスツキの人物史に「博物館活動家」という新たな側面を加えることを目標としている。



パリ万国博覧会ニヴフ展示 (L'Exposition de Paris, 1900)

《後援行事》

NPO 法人まざるか北海道
第5回東日本大震災被災者支援
コンサート「私たちは忘れない！」

2016年3月6日(日)開演 14:46
光塩学園 koen 天秘ホール(大通西14)
参加費:一般 4,000円
ピアノ演奏:遠藤郁子
プログラム:ベートーヴェンピアノ・ソナタ第14番「月光」、ピアノ・ソナタ第23番「熱情」
ショパン/バラード、マズルカ、エチュードより
問合せ:オフィス・ワン TEL 011-612-8696

l'amitié ラミティエ ～保育者・
教員養成校教員有志によるコンサート～

2016年3月21日(月・祝)開演 13:30
六花亭札幌本店・ふきのとうホール(北4西6)
入場料:一般 2,000円、学生 1,000円
出演:(ピアノ)伊藤桂子、長崎結美、須藤宏志、田中宏明、木村貴紀、(声楽)橋本卓三、松井亜樹、石田久大、[客演]石田敏明、大石沙季(ピアノ伴奏)、山本聖子(ヴァイオリン)
曲目:ショパン/バラード第1番、バラード第3番;リスト/ラ・カンパネラ、歌曲「おお、愛せる限り愛しなさい(愛の夢)」ほか
連絡先:TEL/FAX 011-742-1708(松井)

《新会員のひと言》

松山 敏と申します。



札幌に住み着いて30年を超えましたが、このような素晴らしい活動を今更ながら初めて知る事ができました。

日本福音ルーテル札幌教会にて日頃から御厚情を頂いております栗原ご夫妻からのお誘いで、北大構内のクラーク会館国際文化交流活動室のドアをくぐったのは2015年6月のことでした。

朗読会「午後のポエジア」という催しでした。作者の創意が頂点に達した瞬間、執筆者の手元を離れて一人歩きしながら世に溶け混んで消え去ろうとする文章作品が、朗読するパフォーマーの手によって実にパワフルに復活する様は、作曲者が書いた譜面を様々な演奏者の情念によって全く違った色のサウンドとして再び世に放たれるエネルギーと同質のものであると、深い驚きと感動を覚えたものです。

その次は、時計台の二階ホールでのピアノ演奏会でした。主に札幌で活躍されている演奏家たちがこぞってショパンと言う人類共通の感動の壺に集められて鍵盤をかき鳴らし、遙か遠いポーランドの空気感を取り込み、札幌時計台の時刻を超えてサウンドして私たちの心の隔たりを無に至らしめる。

朗読会、音楽会のいずれにおいても、もろもろの国民、種族、民族、国語を超えた民の中から集められた子供や大人たちが、聞こえて来る清らかなパッションに耳を澄ましている。

その中に溶け込んで、私も子供達と同じように、

I listen to hear the sound of righteousness.

日頃の世俗のビジネスの混沌とは確実に隔てられ、溢れ出る喜びの涙に濡れ、ダイナミックな光に溢れたパワフルな世界を愛する皆様方の中に共に新たに迎え入れられているという現実的な出来事に対して、言葉の語源にある真実な事に迫る大きな至福に満たされており。 (まつやま・さとし)

はじめまして。國谷聖香と申します。



この度、松井亜樹先生からのご紹介で、北海道ポーランド文化協会に入会させていただくことになりました。私は大学ではピアノを専攻し、主にショパンの曲に取り組んで来ました(卒業試験はショパン作曲ピアノソナタ第三番全楽章を演奏致しました)。憧れの作曲家の故郷ポーランドの文化を学べるまたとない機会をいただき、とても感謝しております。

以前、ウィーンからプラハへ向かう列車「ドボルザーク号」に乗った時、隣の線路にワルシャワ行き「ショパン号」が待機していました。列車の名前に作曲家の名前が使われるヨーロッパの芸術への深い理解と愛情に感動するとともに、目の前にいるショパン号が向かう線路の先にあるポーランドという国へ想いを馳せたことを覚えています。

その気持ちを胸に、素晴らしい作曲家を生んだポーランドの文化や芸術、音楽教育を学ばせていただきたいと思います。 (くにや・せいか)

ショパンな十月 ショパン・コンクールが終わりました。街に行っても、公園に行っても、音楽に付き添われているような毎日でした。そのため、今年の十月は特別でした。次の五年間聴くことのできないコンクールだから、なおさらです。

z cichym szelestem
pierwsze liście opadły
mozaika dźwięków

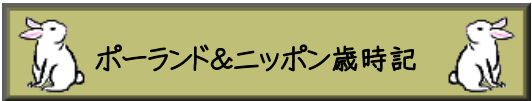
きらさらと
音のモザイク
初落ち葉

ポズナン市、津田モニカ

światło latarni
tka obłok mgły wieczornej
powrót do domu

街灯の
濃い霧を織る
家路かな

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチヨノ



開拓の女三代冬むかえ

(北村牧場チエ・由起・千寿子)

岩見沢市、霜田千代磨

忘却の海を眺めて多喜二の忌

(小林多喜二)

革命歌 10月17日のショパン曲

(10月17日・ショパン命日)

第29回定例総会・出版祝賀会報告

2015年10月17日(土)ホテル札幌ガーデンパレス4F真珠の間にて、第29回総会および『創立25周年記念誌』出版祝賀会が開催されました(総会 16:00~16:45、写真撮影 17:00~、祝賀会 17:15~20:00)。総会には会員18人が出席し、全議案が承認されました。祝賀会には日本人32人、ポーランド人と家族25人が参加し、音楽と料理とお酒で交流を深めました。(総会議長:塚本智宏)



(前列左から) 富山氏、コグト夫妻、小笠原副会長、ブワシチャック所長、安藤会長、霜田副会長、國谷、田口、木村 各氏

第1号議案 2015年度(2014.10-2015.9)活動報告
(報告:安藤厚)

1. 第28回定例総会&懇親会 2014年10月31日(金)
18:30~総会、19:30~懇親会、北海道大学クラーク会館3F国際文化交流活動室、参加者:総会17人、懇親会・日本人17人、ポーランド人21人

2. 例会

- (1)《第70回例会》ヤン・カルスキ生誕100周年記念展示会「私はホロコーストを見た~ヤン・カルスキの黙殺された証言~」(ポスター[写真と解説]等)、2014年10月27日(月)~11月9日(日)、札幌エルプラザ2F交流広場、後援:ポーランド広報文化センター、記帳:約30人
- (2)《第71回例会》カシュブ詩人ヤロミラ・ラブダ朗読会、2015年2月5日(木)18:30~20:00、北海道大学クラーク会館3F国際文化交流活動室、参加者20人超
- (3)《第72回例会》朗読会「午後のポエジア」5、2015年6月13日(土)14:00~18:30、北海道大学クラーク会館3F国際文化交流活動室、出演:エヴァ・コヴァルスカ、新井藤子、レナタ・シャレック、小林暁子、アレクサンドラ・ヤヴォロヴィッチ=ジムニ、大

塚広介、マレク・クラフチック、小笠原正明、越野剛、大久保律子、熊谷敬子、ミハウ・マズル、安藤むつみ、花季汀蘭&汀美、菅原みえ子、霜田千代麿、リリアナ・コヴァルスカ、河村恵李アンナ&明希カリナ、共催:ポーランド広報文化センター、後援:札幌市・札幌市教育委員会、参加者:約50人

- (4)《第73回例会》Concert~ピアノで奏でるポーランド~、2015年6月30日(火)19:00~21:00、時計台ホール、出演:(お話)薄井豊美、(ピアノ)高島真知子、安藤むつみ、名取百合子、横路朋子、協賛:ポーランド広報文化センター、後援:札幌市・札幌市教育委員会、入場者:150人
3. 会誌「ポーレ」発行 第84号(2015年1月1日)、85号(5月15日)、86号(9月1日)
4. 『創立25周年記念誌』発行 A4判、110ページ、2015年8月25日発行、300部印刷。創立25周年記念誌編集委員会:2014年7月9日、10月27日、12月9日
5. 運営委員会 2014年10月6日、2015年1月22日、4月6日、5月20日、7月29日、8月28日
6. 第29回総会・『創立25周年記念誌』出版祝賀会準備会 2015年8月10日、9月11日、9月24日

7. 後援／協力等事業

- (1) 〈後援〉さっぽろオペラ祭 2014／北海道二期会
創立 50 周年記念 オペラ「ショパン」、2014 年 10
月 12～13 日、札幌市教育文化会館小ホール
- (2) 〈協力〉ポーランドで生まれたアートマイムの祭典
「サイレンス・オブ・ザ・ボディー／Milczenie
Cialo」、2014 年 11 月 7～10 日、東京・両国シア
ターX(カイ)
- (3) 〈後援〉遠藤郁子デビュー 50 周年記念ピアノサ
イタル：北海道～パリ～そしてポーランド、2014
年 11 月 8 日 13:30～、札幌コンサートホール
Kitara 小ホール
- (4) 〈協力〉ポーランド映画祭 in 札幌、2015 年 2 月 7
日 14:00～『借金』1999 クシシュトフ・クラウゼ監
督、16:10～『イーダ』2013 パヴェウ・パヴリコフス
キ監督、札幌プラザ2・5、主催：ポーランド広報文
化センター、マーメイドフィルム
- (5) 〈後援〉北大祭 IFF2015 ポーランド料理テント、
2015 年 6 月 4～7 日、北海道大学総合博物館付
近、主催：北海道大学ポーランド人留学生会、協
賛：ポーランド広報文化センター
- (6) 〈後援〉*Kitara* のバースデイ：オルガン、ヴァイオリ
ン、合唱の共演で祝う 18 回目のバースデイ、
2015 年 7 月 4 日 15:00～、札幌コンサートホール
Kitara 大ホール、出演：マリア・マグダレナ・カチ
ョル(第 15 代札幌コンサートホール専属オルガニ
スト、ポーランド出身)ほか
- 第2号議案 2015 年度収支決算報告(10 ページのとおり)
(報告：佐々木保子、齋田道子)
- 第3号議案 2016 年度(2015.10-2016.8)活動計画
(提案：安藤厚)【第6号議案(会計年度変更)参照】
1. 第29回総会・『創立25周年記念誌』出版祝賀会、
2015 年 10 月 17 日(土)、ホテル札幌ガーデンパレ
ス4F真珠の間、総会 16:00～16:45、写真撮影
17:00～、祝賀会 17:15～20:00
 2. 朗読会「午後のポエジア」、2016 年 6 月頃
 3. コンサート
 4. 講演会
 5. 第2回東京例会
 6. 会誌「ポーレ」発行 2016 年 1 月、5 月の 2 回
 7. オンライン広報の強化
- 第4号議案 2016 年度予算(案)(11 ページのとおり)
(提案：佐々木保子)
- 第5号議案 2016 年度役員等案(提案：安藤厚)(新任*)
(会則第6条に基づく役員)
- 会 長：安藤厚

- 副 会 長：小笠原正明、霜田千代麿
- 運営委員：安藤むつみ、氏間多伊子、薄井豊美、大久
保律子、尾形芳秀、越野剛、小林美保、佐々木保子、
高橋健一郎、塚本智宏、富山信夫、中島洋、松井亜
樹*、アグニェシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェプカ
- 事務局長：小林暁子*
- 監査委員：齋田道子、栗原朋友子*
- (会則第15条に基づく事務局、会誌編集委員会等)
- 事 務 局：(事務局長)小林暁子*、(会計)佐々木保子、
(広報)越野剛*、(広報)尾形芳秀*、(渉外)ラファ
ウ・ジェプカ、(庶務)大久保律子*
- 会誌編集委員会：(委員長)氏間多伊子、(委員)尾形
芳秀、栗原朋友子、越野剛、ラファウ・ジェプカ
(会則第16条に基づく東京事務所)
- 東京事務所：(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ*
第6号議案 会則および、会費についての細則の改正
(提案：安藤厚)

【会則の改正】(改正後)

第17条 本会の活動場所は、以下の通りとする。

〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤厚方

2016 年度(2015.10.1-2016.8.31)主な役員は以下の
通りとする。(省略：上記参照)

【会費についての細則の改正】

[1. 会計年度を9月～8月に変更](改正後)

2. 本会の会計年度は毎年9月1日にはじまり、8月31日
におわる。ただし、2016 会計年度は 2015 年 10 月 1
日にはじまり、2016 年 8 月 31 日におわる。(ただし書
きは、2016 年 9 月以降削除する。)

会費は、会計年度のはじめ(毎年9月)に納入す
るのを原則とする。

3. 年度途中に入会する場合には、初年度会費を、1～
4月入会は 2,000 円、5～8月入会は 1,000 円に軽
減することができる。

[2. 退会に関する規定の新設]

4. 会員から退会の申し出があったときは、運営委員会
に報告する。

普通会費を3年を超えて滞納した会員は、退会し
たものとみなす。

住所不明となった会員は、会誌等を通じて探して
も連絡先不明の場合は、退会したものとみなす。

会員の入会・退会は会誌等を通じて周知する。会
員相互の連絡を促進するため、会員名簿を会員に
配布することができる。住所、電話番号等の掲載は、
会員本人の同意がある場合に限る。

(2015 年 10 月 17 日改訂)



出版祝賀会の司会をして

祝賀会の幸福な記憶は徐々に薄れてゆきますが、司会を務めさせていただいた私たちの短い随想で、心の深いところで皆様と再び触れ合うことができれば幸いです。

(司会: ♠ラファウ・ジェプカ & ♥新井藤子=写真右=、写真: 尾形芳秀)



♥ 祝賀会の前に写真撮影=6ページ=。全員の姿をなんとか収めようと、ホテルスタッフの女性が勢いよくテーブルに上がり、会場に歓声が上がりました！

♠ ちょうど広報文化センターのブワシチャック所長が遙か東京からご到着。完璧なタイミングでしたね。

♥ 松井亜樹さんも、忙しいスケジュールの合間をぬって完璧なタイミングで到着、木村悠子さんのピアノ伴奏で「落葉松」を独唱♪会場のキャパシティを超える衝撃的な発声で、雨に濡れゆく曲の主人公の心象と天候が響き合い、変化してゆく情景に引き込まれました。その前には國谷聖香さん、田口綾子さんのピアノ演奏。この日がショパンの命日にあたるのに因んで、ノクターン、ポロネーズ、幻想即興曲と、有名な旋律も多く、自然と聴き入りました♪

♠ ポーランド人は海外に住むとショパンの魅力を数倍感じるといわれます。最初は少し疑っていましたが、日本に住んで、日本人の大好きなショパンの曲をよく耳にし、その不思議な魔法を感じ始めました。ポーランド恋しさから生まれた彼の曲を聴くと、懐かしい記憶が蘇ってきます。ポーランドで、いつもラジオなどから流れていた音楽が心に刻まれていて、子供時代にタイムスリップします。ポーランド人はみな一瞬実家に帰った気分になったと思います。

♥ 民族の精神性に及ぶいいお話ですね。

つづいてポーランド国歌「ドンブロフスキのマズルカ」斉唱♪=写真左下=これは「ポーランド国歌を日本で聴くことは殆どないので」といって実現したそうです。国歌は決して余興に歌うようなものではありませんが、実際に斉唱されると会場の空気がとても柔和になった気がします。

♠ 大変な戦いと血を流した祖先を連想させる曲で、最初はちょっと戸惑いましたが、ポーランド人にとっては希望を与える歌でもあるので、喜んで歌いましたよ。次回のイベントのプログラムにもぜひ「ドンブロフスキのマズルカ」を入れましょう。

♥ ぜひ！新たな恒例を作ってください。ジェプカさんが解説した、国歌が確立されるまでの歴史的経緯も、とても意義があると思います。

つづいて安藤会長の挨拶。いつもと変わりなく気さくでリラックスして、協会の運営状況から、協会にご貢献・ご協力いただいたあらゆる方々の紹介まで、会場の皆さんとのつながりがよくわかりました。

♠ 感謝を述べる機会はあまり多くないですが、ポーランド人はみな、会長ご夫妻をはじめ協会のみなさまのご活動のおかげで、北海道がより住みやすくなっています。本当にありがとうございます！

♥ こちらこそ。つづいて、ご来賓、ポーランド広報文化センター所長のミロスワフ・ブワシチャックさまの流ちょうな日本語のお祝辞=写真下右=。協会のもつ気がかりに、ずっと陽が差すようなお話でした。遠路ほんとうにありがとうございます！今後も東京のセンターのお力添えを得ながら、北海道にしかない魅力を前面に出していきたいですね。

♠ 全国レベルでも目立つ協会の動きがポーランド大使館にやっと高い評価を受けて、そのおかげで在北海道のポーランド人までサポートが届いていて、とても嬉しいです。

♥ さて、次は運営委員・事務局広報担当の尾形芳秀さんによる乾杯の音頭。ここから席移動や歓談が始まって、祝宴ムード満開でした♪



◆ 料理が美味しかったですね！お酒が入ると舌も柔らかくなって、参加者がより仲良くなって、色々な話をしました。次回のイベントのアイデア、お互いの友達の事情など、話題はさまざまでしたね。

♥ ジェプカさん、本当に楽しそう(笑)。私も！料理がとても美味しかった。そんな素敵な雰囲気の中、リアナさん、恵李アンナさん、明希カリナさんによる唱歌♪=写真右=回を重ねて歌い方や所作に創意工夫が表れて、朗読会の時よりもさらに上手でした。安藤むつみさんの清らかな伴奏で、女の子たちのあどけなさがさらに際立ちました。民族衣装もとてもよかったです。



◆ 民族衣装はやはりインパクトがありますね。所長が「次回ポーランド人女性の参加者は全員ミンゾク衣装を着るのだ！」と言ったのは冗談ですが、いいアイデアですね。僕もタトラ山地の衣装がほしい！

♥ タトラ山地は B・ピウスツキとも縁が深いから、私もほしい！盛り上がったところで、バルバラ・ナピエラワさんのギター演奏で=写真左・下左=、ポーランドのみなさんの大合唱「さあ、私の世界に色をつけて」♪80年代のバンド「2プラス1」は、男性二人に女性一人、日本ならドリカム風の構成の走りとか。



◆ 80年代の大ヒット曲でした。クラクフのラジオ局RMFのテーマソングで、「Magda M.」という大人気テレビドラマの主題歌なので、各世代が歌えると気づきました。歌いやすくて明るくていい曲ですね。

♥ 本当にいい曲でしたね。つづいて、スピーチもありました。まずカジミェシュ・コグトさん=写真右=の昨今の日本における「挨拶」「会話」の退行への強い訴えは、この会場だけで聞くのは惜しい内容でした。つづく亀枝延枝さんのお話では、旦那様のコグトさんとの馴れ初めから、当時のポーランドへの渡航の困難さやそれを乗り越えた人だけが体感できた、ポーランド人の誠実さ、あたたか



さがよく伝わってきました。次に富山信夫さん、小笠原副会長=写真右=の協会の年譜ができるほどの語り！時間が足りず残念でした。今後もこうして協会の歴史を学んでいきたいですね。



◆ こういうときポーランド人も勇気を出してスピーチをしてほしかった。コグトさんに感謝！



♥ 隣の人との会話にも声を大にして、耳を口元まで近づけないと聞こえない盛況の中、菅原みえ子さんの芝居仕立ての自作詩の語りと、霜田副会長=写真すぐ下=の轟くような詠い。途端に会場は水を打ったように静まり、耳を傾けました。盛り上がって騒がしくなるだけではなく、静まり返ることもあるのですね。

◆ 副会長の轟きは有名ですね。数年前うちの長男がびっくりして泣いてしまった(笑)。



♥ ミコワイ君=写真下右=にもスピーチで場を盛り立ててもらい、感謝！副会長の轟きは、まさに協会の魔除けですね。活況のうちに鶴の一声で一本締め、実に日本的な胸のすく閉会でした。

◆ 副会長にステージに呼ばれて「スト・ラット」(百年を)を歌って♪ポーランド的な閉会でもありました！

♥ そうでしたね！一本締めの前に、ポーランドのみなさんが壇上にのぼって再び大合唱♪会場は幸福感で一杯でした。

祝宴中、霜田副会長も「これまでは日本人が日本語だけで会を進行し、ポーランド人は見ているだけのことも多かった。こんなにポーランド人も日本人も盛り上がって言葉を交わす会も珍しい」と言っていました。長年の活動の積み重ねが実を結んで、いよいよ協会の名前にもある「文化」の交流が、より人間らしい体温を持ち始めたのでしょうか。

◆ そうですね！バイリンガルの司会も重要な一歩でしたね。お疲れ様でした！

♥ 私もポーランド語、ちゃんと勉強しなきゃ。ジェプカさんもお疲れ様！ありがとうございました！



2015年度 収支決算書
(自2014年10月1日～至2015年9月30日)

【収入の部】	予 算	決 算	備 考	(単位:円)
会費	200,000	289,000	全額(93人×3千)の105%、うち2016年度分93千	
演奏部会基金取崩	150,000	0	一般会計ではなく特別会計に繰入	
寄付金	30,000	61,880		
その他	30	18	ゆうちょ貯金利子	
小 計	380,030	350,898		
前期繰越金	221,179	221,179	郵便振替179,406円、現金41,773円	
合 計	601,209	572,077		
【支出の部】				
事業費	80,000	45,155	第28回総会18千、第70回〈カルススキ展〉5千、第71回〈ラブダ朗読会〉16千、第72回〈ポエジア〉6千	
25周年記念事業費	200,000	50,000	演奏部会基金に繰入(立替)	
連絡費	40,000	56,289	ポーレ・記念誌送料、はがき、切手他(記念誌送料30千)	
編集費	30,000	16,260	ポーレ制作費(84号, 86号)	
会合費	20,000	18,267	運営委員会	
事務費	35,000	15,479	トナー、文具	
予備費	196,209	100	振込手数料	
小 計	601,209	201,550		
次期繰越金	0	370,527	ゆうちょ銀行355,266円、現金15,261円	
合 計	601,209	572,077		

演奏部会基金	【収入の部】	【支出の部】	備 考	(単位:円)
繰越金	207,371		2014年度残高	
利 息	34		北洋銀行	
コンサート繰入金	24,892		第73回例会(時計台コンサート)	
記念誌印刷代補助		198,616	大同印刷、記念誌特別会計に繰入	
合 計	232,297	198,616	33,681 (差引残高)	

特別会計 【北大祭テント】	【収入の部】	【支出の部】	備 考	(単位:円)
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター	
経費		50,000	レンタル費用、テント登録費	
合 計	50,000	50,000	0 (差引残高)	

【午後のポエジア】	【収入の部】	【支出の部】	備 考	(単位:円)
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター	
一般会計より補助	6,446			
経費		56,446	飲食費、広報・事務費	
合 計	56,446	56,446	0 (差引残高)	

【時計台コンサート】	【収入の部】	【支出の部】	備 考	(単位:円)
チケット売り上げ	119,000			
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター	
経費		144,108	会場・調律費、印刷費、出演者研修費等、記録費、懇親会費	
演奏部会基金に繰入		24,892		
合 計	169,000	169,000	0 (差引残高)	

【25周年記念誌】	【収入の部】	【支出の部】	備 考	(単位:円)
一般会計より繰入	50,000		ポーランド広報文化センター助成金立替	
演奏部会基金より繰入	198,616			
印刷費		248,616	大同印刷	
合 計	248,616	248,616	0 (差引残高)	

会計監査報告書

平成 27年10月8日、札幌エルプラザ内において、会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認致しましたのでここに報告します。 平成27年10月8日

監査委員 斎田 道子 印 監査委員 小林 暁子 印

2016年度 会計予算書				
(自2015年10月1日～至2016年8月31日) (細則改正により変更)				
【収入の部】	前年度決算	予 算	備 考	(単位：円)
会 費	289,000	200,000		
寄付金	61,880	30,000		
雑収入	18	30	貯金利子等	
小 計	350,898	230,030		
繰越金	221,179	370,527		
合 計	572,077	600,557		
【支出の部】				
事業費	45,155	150,000	第29回総会100千、(その他の例会)50千	
25周年記念事業費	50,000	-		
連絡費	56,289	70,000	ポーレ発送、はがき、切手他	
編集費	16,260	30,000	ポーレ制作費他	
会合費	18,267	20,000	運営委員会他	
事務費	15,479	25,000	PPC用紙・文具他	
雑費	100	1,000		
予備費	0	304,557		
小 計	201,550	600,557		
次期繰越金	370,527	0		
合 計	572,077	600,557		



《新刊紹介》

♪『ポーランドのクリスマス聖歌 12のコレンダ』♪

昨年11月に、ポーランド広報文化センターの協賛で『ポーランドのクリスマス聖歌 12のコレンダ』*という楽譜が出版されました。

今から 20 年前、私たち家族がワルシャワに暮らしたとき、ポーランド語は話せなくとも、歌なら覚えたいと思い、コレンディの楽譜とカセットテープ3巻(当時のワルシャワのわが家にはカセットデッキしかなかったのです)を買って帰りました。

札幌に戻ってから毎年クリスマスの季節になると、そのテープを聴きながらクリスマスの飾りつけをしています。どれもとても美しい曲ばかりです。

その中からショパンのスケルツォにも引用されている「Lulajże Jezuniu おやすみ、イエス様」の一番の歌詞だけはやっと覚えて、当協会の総会・懇親会で弾き歌いをしたことがありますが、その他は機会がなくてなかなか覚えることが出来ませんでした。

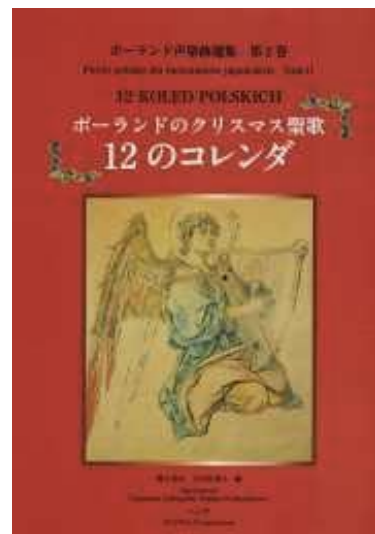
でもこのたび出版された楽譜には、嬉しいことにポーランド語の歌詞の上にカタカナで「ルビ」がふってあって、私にも覚えられそうです。

この楽譜に収められている12曲はすべて、私がポーランドから買ってきた楽譜にも入っています。

いつかその中から何曲か歌う機会があればいいなあと、今からちょっとワクワクしています。

(安藤むつみ)

* 関口時正・小早川朗子編、発行:(株)ハンナ、協賛:ポーランド広報文化センター、2015.11.25





クルニク城、Stanisław Nowaki 撮影、2005

クルニク城

ポズナンの南 25 キロほどのところにある人口約 6,800 の小さな町クルニク Kórnik の中心部にある城は、堀に囲まれ、その水面に姿を映す壮麗な建造物で、観光の名所。1452 年に豪族ミコワイ・グルカ Mikołaj Górka がこの城を建て、その孫でポズナンの県知事のスタニスワフ・グルカが 16 世紀の後半にルネサンス様式に城を改造した。スタニスワフは、グルカ家の最後の男性だったため、彼の死後クルニク城は何度か所有者が変わり、1676 年にチャウインスキ家の所有に帰した。

18 世紀のクルニクの城主は、テオフィラ・チャウインスカ Teofila Działyńska (1714–1790) で、「白い貴婦人」の異名で民間によく知られている。

テオフィラは、クルニクの領主ズィグムント・チャウインスキを父としテレサ・タルウォを母として 1714 年 11 月 26 日にクルニクに生を享けた。7 歳の時、父を亡くし、11 歳の時、母にも死なれて、孤児となった。彼女の幼年時代と少女時代については情報が無く、その後、結婚までの 7 年間をどこでどのように過ごしたかは、まったく不明である。

1732 年にチェムピンの領主の息子ステファン・ショウドルススキ Stefan Szoldrski に嫁ぎ、夫婦でチェムピンに住み、三人の子をもうけたが、子どものうち 1736 年生まれの子フェリクスだけが生き延びて、のちにノヴィ・トミシル Nowy Tomyśl の町の創設者となる。

テオフィラの最初の夫は 1737 年に死亡。1743 年にテオフィラは再婚。二度目の夫のアレクサンドル・ポトゥリツキは、テオフィラよりも 8 歳若く、彼の所有地は妻のそれよりもずっと小さかった。その故か、この結婚においてはテオフィラが支配的立場にあり、結婚生活はうまく行かず、1754 年には離婚にいたった。以後、テオフィラは、独身生活を続け、クルニクとルノヴォ・クライェンスキの所有地と財産の管理運営の仕事に専念した。

クルニク城の「白い貴婦人」

女傑テオフィラ

テオフィラはクルニク城を所有するチャウインスキ家の傑出した代表者だった。18 世紀後半のポーランド国家の全般的な凋落の時代にありながら、テオフィラは、クルニクと隣接のブニン Bnin の町を繁栄に導いた。

テオフィラがこの事業を達成できたのは、とりわけプロテスタントのドイツ人の入植者たちの集落を町にまで発展させたことと、ユダヤ人を支援したことによる。信仰を異にする異邦人を援助したことでテオフィラは中傷誹謗にさらされたが、彼女は動じなかった。ブニンの町にルター派のプロテスタント教会と町庁舎を建立し、またクルニクの教区教会(カトリック)の改築を行なった。

1740 年には所有地における賦役と現物での年貢を小作料に替えた。クルニク湖にダムと堤防を築き、道路を敷設し、風車、水車を建設した。この事業の達成によりクルニクはかなり大きな町に発展し、近くのシレムやシロダ・ヴィェルコポルスカを上回る町となり、1793 年のポーランドの第 2 次分割後はシレム郡の暫定的郡庁所在地とさえなった。

テオフィラは、文化問題にも強い関心をいっていた。ベルリンの王室図書館と交渉を持ち、《Journal encyclopedique 百科事典雑誌》を予約購読していた。建築様式や美術の新しい時代傾向に敏感で、クルニクの居城をバロック様式に改築し、庭園をフランス風に造園した。

「白い貴婦人」の肖像

テオフィラは、1790 年 11 月 26 日に世を去り、クルニクのカトリック教会の地下納骨堂に葬られた。享年 76。テオフィラのクルニクの町の発展に対する功績については議論の余地が無いにもかかわらず、テオフィラは、すでに生前からとかく口さがない世間の噂に囲まれていた。寡婦は複数の男たちと不倫関係にあり、とくにクルニクのカトリック教会の教区司祭やブニンのルター派教会の牧師との関係が取り沙汰された。

テオフィラの死後、現在クルニク城の食堂の壁を飾っているテオフィラの純白のロングドレスに身を

「婦人」の幽霊伝説

栗原 成郎

包んだ肖像画「白い貴婦人」が、19世紀にはいると、幽霊伝説の源泉となった。

夜の12時少し前になると、テオフィラは、肖像画から抜け出して、ひらひらする白いロングドレスの裾を手で押さえながら、玄関口に出て、庭園へ向かう。12時になると、黒馬に乗った騎士が駆けつけてきてテオフィラと落ち合う。騎士は、テオフィラを黒馬に同乗させて並木道を駆け、二人は闇の中に消える。一番鶏が鳴くと、いつのまにかテオフィラは肖像画の額の中に戻っている。

「白い貴婦人」の幽霊伝説の起こりは、テオフィラが夕方しばしば公園を散歩したことが契機となっているらしい。テオフィラは、厄介な偏頭痛に悩んでいた。その痛みを和らげるために、彼女は自分の趣味に合わせて造らせたフランス風の庭園の中で時を過ごすことを好んだ。



クルニク城の「白い貴婦人」
テオフィラ・チャウインスカの肖像
Antoine Pesne (1683-1757) 画、1754

テオフィラをランデブーに誘う黒馬の騎士の正体は不明であるが、この夜の騎馬遊行は、クルニクの湖畔にあった中世の古い館の廃墟の伝説と結びつけられている。現在のクルニク城の近くに、ひと昔前にクルニクの領主であったグルカ家の狩猟

用の館が廃墟として残っていた。グルカ家は、権勢をふるった豪族で、莫大な財宝を狩猟館に隠していた。スタニスワフ・グルカの死後、その財宝は悪霊たちが護っていた。狩猟館は時の経過とともに廃屋と化していったので、町の住民たちがその財宝を手に入れたと思うのも不思議ではなかった。しかし、財宝の守護者の悪霊が他人の侵入を許さなかった。

クルニクの古文書は、テオフィラが領地の管理運営の能力に長けた理財家であったことを伝えているが、ある日、大火が生じて町の大半が灰燼に帰した時、グルカ家の廃屋と化した狩猟館の解体をテオフィラが命じ、取り壊して残った煉瓦を罹災した町民に分配して、その後の火災に備えてその煉瓦で各戸に煙突を建てさせたことを領主の英断として記している。

伝説によれば、グルカ家の財宝の守護者であった悪霊が、狩猟館解体による昔のグルカ家の財宝の雲散を恨んでその行方が明らかにされる時まで、テオフィラに夜の公園をさまよいつけさせることによって復讐しているのだという。

クルニク城にはチャウインスキ家によって収集された選りすぐった蔵書と美術品の膨大なコレクションがあり、現在それらはポーランドアカデミーの管理下にある。

2012年秋にクルニクを訪れた際、「白い貴婦人」の幽霊伝説については、購入した案内書『クルニク城』にも記述はなく、専属ガイドによる説明においても触れられることはなかった。

〈参考文献〉

Zamek w Kórniku – Przewodnik. Wydawnictwo ZET. Wrocław 2011.

Bogna Wernichowska, Maciej Kozłowski. Duchy Polskie. Wydawnictwo PTTK. „Kraj” Warszawa, 1983.

* くりはら・しげお 1934年2月21日東京都目黒区生まれ。

北海道との縁は、船舶会社勤務の父親の転勤により1949-52年小樽潮陵高校で学んだのが最初。その後、二度目の縁で北海道大学文学部に勤務(1992-97)。その時代が楽しかったので、三度目、2007年より札幌に移り住む。

ポーランドとの縁は日本との学术交流によりワルシャワ大学に勤務(1976-77)したことによる。

東京大学名誉教授。



『ポーランド語辞典』の頃の思い出 (2)

小原 雅俊



『白水社 ポーランド語辞典』のもうひとりの隠れた共編者が、実は千野先生だった。白水社の編纂室に詰めた三年間、仕事が片付く頃には必ず顔を出した。そのあとに、毎週、恒例のスラヴ学者たることを証す饗宴が続いたことは言うまでもない。この饗宴には当時のスラヴ学を担った錚々たるメンバーがことあるごとに集まってきたものだった。

飲めば飲むほどに文字通り鼻息は荒くなるが、決して乱れることのない森安達也氏(1941-1994)もそのひとりだった。貴公子然とした風貌と穏やかで端正な佇まいは、私などとは違った、まさにエリートに相応しいものだったが、この世界では数少ない同世代の人間に属していたこともあったろうか、私たちは互いに親近感を抱いていたように思う。その学問的伝統を熟知した緻密な知識と大胆な発想が生み出した仕事はスラヴ学研究の新たな領域の誕生を予告するものであった。だが、この若い才能も病魔が奪い去ってからも随分になる。

もうひとり、私にとって忘れられない存在に米川和夫氏(1929-1982)がいる。私がワルシャワに着いたとき、米川和夫氏は帰国直前だった。帰国してからも滅多に顔を合わせることはなかったが、絶えず気になっていたのは、私にはどれほど努力しても身につけることができないであろう翻訳の味と、そして何よりもポーランドの大学でポーランド文献学を学んだ者に見られる関心の共通性だった。今も

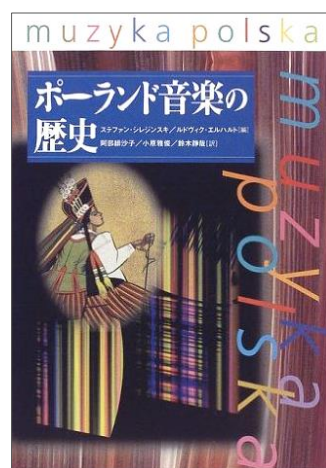


キエフにおける国際スラヴィスト会議(1983年9月)にて(左より)森安達也、千野栄一、米川哲夫(和夫氏長兄)、灰谷慶三(本会第三代会長)の各氏(筆者撮影)

私は、イヴァシュキェヴィッチやナウコフスカ、ポロフスキやルジェヴィッチの文学への関心は、木村先生と米川さんのあとを継いで、と言ったら失礼に当たらるだろうか、持ち続けている。

米川さんもその後、まもなく病魔に冒されて世を去ってしまった。不思議な縁だと思うのは、米川さんが生前、ずっと教鞭を執っておられた早稲田大学の語学教育研究所のポーランド語の授業が突然私に回ってきたことだった。以来、今の大学の多忙さがゆえに若いロシア・ポーランド文学研究者に代わってもらうまで、確か十三年間、未亡人のナナさんとともに、外部からの熱心な受講生も受け入れながら、ポーランド語を教える場を守ってきたものだった。

最近、シレジンスキ、エルハルト他著の『ポーランド音楽の歴史』(音楽之友社、1998)という本を二十年掛けて出版したが、これもまた、もし、あのようになかったら、本来、米川さんが完成させるはずのものであった。とまれこうして、米川さんへの負債のひとつはどうか片を付けることができたことを喜んでいる。



私がここに書きつけた物語は、この四半世紀の間に起こったことだ。どれをとってみても私には、つい昨日のことのようだ。たかが二十五年、だがこの僅かな時間を埋めた、ポーランドに関わり、ポーランドを愛した人々の夢の何と濃密だったことか。今は亡き人々と、ともに語らい、仕事に励んだ日々の何と歓喜に満ちていたことだろうか。(1999年6月)

*こはら・まさとし 1940年福島県生まれ。執筆当時、東京外国語大学ポーランド語専攻教授。本稿はワルシャワ大学刊の JAPONICA 12/2000 に Henryk Lipszyc, Romuald Huszcza 両氏によるポーランド語訳が掲載された。

2015年 ノーベル文学賞受賞者 ポーランドの隣国  ベラルーシ初、ジャーナリスト出身初の受賞
授賞理由：我々の時代における苦難と勇気の記念碑と言える多声的な叙述に対して



スヴェトラナ・ アレクシエーヴィチ について



越野 剛

2015年のノーベル文学賞に選ばれたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチはベラルーシの作家だが、生まれはウクライナであり(父はベラルーシ人、母はウクライナ人)、ロシア語で作品を書いている。

ベラルーシもウクライナもロシアも作家が誕生したときにはソ連というひとつの国家だった。むしろアレクシエーヴィチを今はなきソ連を代表する作家だと言った方がよいかもかもしれない。実際、彼女の作品(幸いにもほとんどが邦訳されている)は、独ソ戦争、アフガン戦争、原発事故、ソ連崩壊の混乱などを体験し、社会主義時代の記憶を刻み込まれた人々の語る声を丹念に拾い集めたものだ。

ちなみに原発事故で生活に影響を被った人々に取材した『チェルノブイリの祈り』(岩波書店、1998)は、今の日本人にとっても必読の書だろう。

ベラルーシは独立後も社会主義的な制度の多くを保存し、国民の多くがそのような政策を支持している。ヨーロッパ最後の独裁者とも揶揄されるルカシェンコ大統領は、ソ連への強いノスタルジーを公言してはばからない。ノーベル文学賞がアレクシエーヴィチに決まって1週間も経たないうちに、ルカシェンコが5度目の大統領選挙に勝利したというニュースが報道された。日頃は国際的なニュースに縁のないベラルーシ人にとって何とも皮肉なめぐりあわせである。

アレクシエーヴィチの作品はドイツを初めとするヨーロッパで好意的に紹介されたことがノーベル賞につながったと思われるが、もともと旧ソ連地域の知識人の間でも高く評価されていた。しかし戦争や原発事故の忘れてしまいたいような醜い側面をさらけ出す彼女の作品は、ロシアやベラルーシでいつも歓迎されてきたわけではない。例えば『アフガン帰還兵の証言』(日本経済新聞社、1995)は戦争の悲惨な場面だけを歪めて描いているとして、90年代のベラルーシでは帰還兵や遺族の一部がアレク

シエーヴィチを訴えるという騒ぎになった。

ルカシェンコが大統領になってから彼女の作品はベラルーシの出版社が扱うことはなくなり、すべてロシアで刊行されるようになった。そのロシアでも、西欧で作家の評価が高まるのと比例するかのようには、アレクシエーヴィチは反ロシア・反愛国的な作家だとして弾劾する声が目立つようになっている。ロシアによるウクライナへの干渉やクリミア征服を批判するような彼女の勇気ある発言も、ロシア人のナショナリズム的な反感の火に油を注いでしまった。

ベラルーシでは少し事情が異なっている。ロシアによるウクライナへの軍事介入にはルカシェンコも実は批判的であり、奇しくもアレクシエーヴィチの立場と重なっている。しかもノーベル賞というブランドの力は大きいだろう。今まで何人もノーベル賞受賞者を出しているロシアとは違い、ベラルーシという小国でこれほど国際的に榮譽のある評価を受けた人物はアレクシエーヴィチが初めてである。

いままで作家を無視し続けてきたルカシェンコ政権も今回は彼女に祝辞を送らざるをえなかった。ベラルーシの教育省では作品を高校の授業に取り入れることを検討しているという。アレクシエーヴィチのノーベル文学賞受賞は、ベラルーシ人が社会主義の記憶の呪縛から解放され、自分たちの歴史を見直すきっかけになるのかもしれない。

[北海道新聞 2015年11月2日夕刊5面より転載]



*こしの・ごう 1972年札幌生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。2001-03年在ベラルーシ日本大使館専門調査員。現在は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授。専門はロシア・ベラルーシ文学。訳書に『風に祈りをーリホール・バラドゥーリン詩集』春風社、2007年などがある。

今後の活動予定(本号1～4ページ参照)

《共催》さっぽろ雪まつり第43回**国際雪像コンクール・ポーランドチーム応援**、2月4日(木)～8日(月)、大通西11丁目国際広場

《第74回例会》**久山宏一氏講演会:ポーランド映画『灰とダイヤモンド』の成立と受容**、2月5日(金) 18:30～20:30、札幌エルプラザ4F 中研修室

《後援》**ポーランド映画祭 in 札幌**、2月6日(土) 11:00～19:45、札幌プラザ2・5(南2西5)、上映作品:「エヴァは眠りたい」「約束の土地」「ヴァバンク」

《第75回例会》**新井藤子氏講演会:ピウスツキと日本、北海道、先住民族**、2月20日(土) 14:00～16:00、札幌エルプラザ4F 中研修室(北8西3)

《後援》**NPO 法人まざるか北海道第5回東日本大震災被災者支援コンサート**、3月6日(日)開演 14:46、光塩学園 koen 天秘ホール(大通西14)

《後援》**l'amitié ラミティエ～保育者・教員養成校教員有志によるコンサート～**、3月21日(月・祝)開演 13:30、六花亭札幌本店・ふきのとうホール

会員連絡先のお尋ね

下記の会員の消息をご存知でしたら事務局へご連絡ください。高橋 敦子 さん(元 札幌市豊平区)、本谷 英一 さん(元 江別市)

事務局:電話・FAX 011-556-8834(安藤)

メールhokkaidopolandca@gmail.com

住所変更は事務局へご連絡を!

入会・退会(ご芳名)

入会:(2015.10)前田理絵、國谷聖香、園部真幸
退会:(2015.9)奥村喜久美、金田一真澄、兒玉忠征、木曾育恵、(2016.8)小川政邦 (敬称略)

ご寄付(維持会費)ありがとうございます(ご芳名)

新井藤子、安藤厚(2)、安藤むつみ(2)、大塚広介、尾形芳秀(2)、栗原朋友子(4)、越野剛(2)、小林暁子(3)、小原雅俊、佐々木保子、霜田千代麿(12)、霜田英麿(7)、高島真知子、富山信夫(2)、名取百合子、野村信史(2)、前田理絵、松永吉史、松山敏(2)、水田香、山本伸一(2)、横路朋子

(2015年9月～12月)

※1口千円()内は2以上の口数、五十音順、敬称略

新年度(2015.10～2016.8)年会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生 1,500 円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】**記号** 02740 5 **番号** 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ 事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局の**ATM扱い**(手数料は無料)でお願いします。

※ 今回の納入お願い額を記した個別の文書と振替用紙を、後日別便でお送りします。



目次

第43回国際雪像コンクール ポーランドのチームが挑戦／

ミュンヘン・クリスマス市 in Sapporo ポーリッシュ・ポタリーの出店(報告)(尾形芳秀) 1

《第74回例会》久山宏一氏講演会:『灰とダイヤモンド』の成立と受容 2

ポーランド映画祭 2015 in 札幌 3

《第75回例会》新井藤子氏講演会:ピウスツキと日本、北海道、先住民族／《後援行事》コンサート 4

《新会員のひと言》(松山敏、國谷聖香)／ポーランド&ニッポン歳時記(モニカ、ピョトル、千代麿) 5

第29回定例総会・出版祝賀会報告(塚本智宏) 6

『創立25周年記念誌』出版祝賀会の司会をして(ラファウ・ジェプカ&新井藤子) 8

会計報告(2015年度決算、2016年度予算)(佐々木保子、斎田道子) 10

《新刊紹介》『ポーランドのクリスマス聖歌 12のコレнда』(安藤むつみ) 11

クルニク城の「白い貴婦人」の幽霊伝説(栗原成郎) 12

『ポーランド語辞典』の頃の思い出(2)(小原雅俊) 14

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチについて(越野剛) 15